138号
2023年12月31日

ひらかた文化財だより

発行
枚方市 観光にぎわい部 文化財課
〒573-8666
大阪府枚方市大垣内町2丁目1番20号
電 話：072(841)1411
ファクス：072(841)1278

百済寺跡築地塀復元工事

築地塀復元配置図

版築
基部
基底幅

築地塀のイメージ図

文化庁文化財部記念物課　監修
『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』2013所収　一部加筆

　特別史跡百済寺跡再整備工事は今年で９年目と大詰めを迎え、今年度は築地塀の復元工事を実施しています。築地塀は土塀のことで、右上のイメージ図のようなものです。創建当時の百済寺はこんなものだったのかということを体感してもらう仕掛けとして、『延喜式』や現代に残る古代建築である法隆寺西院などを参考に復元設計しました。

　史跡内に歴史的建造物を復元するには、文化庁の専門分科会の一つである「史跡等における歴史的建造物復元の取扱いに関する専門委員会」という非常に長い名称の委員会に諮り了承をもらう必要があります。築地塀の復元設計は、この委員会で計６回の審議を経て、足掛け約２年半という非常に長い年月をかけ、ようやく了承を得ました。

　築地塀の復元工事は、南門から東門までの約 120 ｍを簡略工法、東門から北約 6m 地点までを在来工法で工事をしています。簡略工法とは現代の工事方法で、築地塀本体部分の内部は鉄骨で組み、その上から木組みをして合板を貼り付け、最後に土壁の風合いを左官仕上げでコテを使って塗っていく方法で、いわゆるハリボテです。

　在来工法とは、古代の工事方法そのままに、土塀の部分を土や砂で搗き固めて作るやり方です。この方法を版築と呼び、堰板で囲まれた枠内に土や砂を均一の厚さに敷き詰め、およそ半分ほどの厚さになるまで搗棒という重くて細長い棒で搗き固める作業を繰り返し、土塀を作る方法です。

　今回は、この二つの工法で作られた築地塀復元工事の舞台裏を紹介します。

簡略工法の築地塀本体工事

全長 120 ｍを鉄骨で組んでいます。

内部はこのように空洞です。

在来工法の築地塀本体工事

まず土を盛ってならし・・・

ひたすら搗き固めます。

今回、版築の工事では厚さ 10 ㎝程度に敷き詰めた土を、6 ㎝くらいになるまで搗き固めることを繰り返し行っています。築地本体の高さは 2.2 ｍですので、わずか 6 ㎝の厚さを 2.2 ｍまで積み重ねると思うと本当に根気のいる作業だと痛感します。

屋根工事

わかりますでしょうか？木材と木材を繋ぐ継ぎ手にも工夫が見てとれます。

屋根の木工事でも、日本古来の技術が駆使されています。

瓦の製作

軒瓦は型枠でプレスした後、人の手で調整しています。やはり根気のいる作業です。

築地塀復元工事見学会

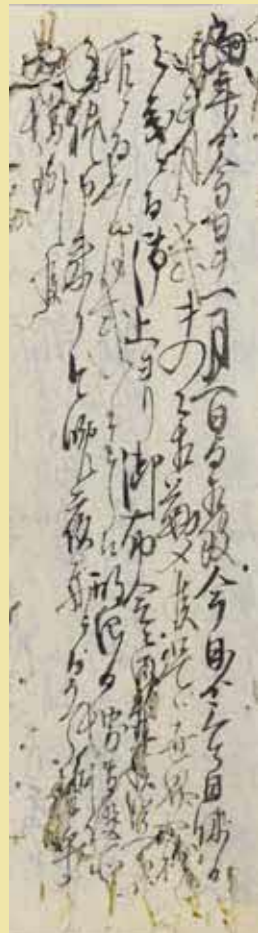
工事の様子を市民に公開しました。

文化財コラム

12月なのに元日！？ －太陰暦から太陽暦に－

明治５年（1872）11月９日、従来使われていた太陰暦から今の太陽暦に変わることが国から通達され、明治５年12月３日が明治６年１月１日となることになりました。中振村の庄屋を代々勤めた畠山家の人物が記した日記によれば、中振村の人たちがそのことを正式に知ったのは改暦の11日前の11月21日のことでした。

例年なら12月中旬から暮の挨拶や掃除など迎春準備が始まりますが、急な通達だったためか、11月28日に煤払い、12月に入り、１日に餅つきとしめ縄づくり、２日に正月の飾りやお供えなど、５日前から慌ただしく準備をして新年を迎えました。１月１日となった12月３日は雑煮とおせち料理で正月を祝い、年頭の挨拶をして元日を過ごしました。

右の写真は、改暦について説明をした部分で、細かな文字でびっしりと詰めて書かれています。最初の３行の内容は次の通りです。「今年から今日を１月１日に改め、今日から３日間は休日なので、正月行事を行った。これは世界一体の事で、政府からの布令である」、つまり世界基準の暦に変わると記しています。太陽暦はすぐになじむものではなかったためか、明治５年の日記はそのまま12月晦日まで書き続けられ、翌明治６年の日記は太陰暦の正月朔日にあたる１月29日から書き始めています。この日は元正月として朝雑煮祝いをしたこと、暦が変わったためこの日以前の日記は前年にあることが書かれています。新暦と旧暦の２回正月祝いをしたことなど、突然の改暦にあわせて元日を迎えたものの、割り切ることができなかった人々の様子がよくわかります。

「中振村役人日記」
明治５年12月３日条

日々の暮らしを綴った日記は、農作業の様子、村役人としての勤めや寺院・神社・親戚などとのつきあいなど、私的な内容が書かれたものですが、書いた人の暮らしぶりやその時々の心情が書き留められた貴重な史料です。この日記は『中振村役人日記』（枚方市史資料第４集～７集※）として刊行されていますので、ご覧になってみてはいかがでしょうか。

※各1,200円。市史資料室・枚方市役所別館１階受付で販売しています。

イベント開催予定

お知らせ

	イベント名	開催日
輝きプラザきらら展示ルームで開催しています		
①	文化財展示会 「ひらかたの発掘・いまむかし」	2/26（月）まで
旧田中家鋳物民俗資料館で開催します		
②	文化財防火デー消防訓練	1/27（土）
③	ちょこっと展「冬のくらし」	1/20（土）～3/24（日）
④	彫金連続講座（全５回）	1/21･28、2/4･11･18（日）
⑤	バーナーワークとんぼ玉連続講座（全３回）	2/14･21･28（水）
⑥	考古学講座 「中世のひらかたを学ぶ」（全２回）	2/20・27（火）
⑦	わらに親しむ～鍋しきづくり～	2/22（木）
⑧	まが玉をつくろう！	3/23（土）
楠葉で開催します		
⑨	市内歴史ウォーク 「あるいてみよう！楠葉」	3/19（火）
鍵屋資料館で開催します		
⑩	市民歴史講座「国登録有形文化財登録記念　鍵屋別棟見学会」	3/26（火）

◆旧田中家鋳物民俗資料館 2/20・27（火）
考古学講座「中世のひらかたを学ぶ」（全２回）

枚方市の中世について２回にわたりお話しします。１日目は「枚方の中世（遺跡）」について概観し、その特質のお話を通して、中世という時代を実感していただこうと思います。２日目は中世の土器などの遺物に触れ、石こうを使って、割れた遺物の復元作業を体験していただきます。ぜひご参加ください。

楠葉野田遺跡出土遺物

事業報告

◆市史資料室　10/2・16・30、11/13・27（月）
「古文書中級講座（全５回）」 49人

京都外国語大学の村山弘太郎准教授を講師にお招きして、今回は三矢村の古文書を読みました。三矢村は枚方宿を構成する４村（岡村・岡新町村・三矢村・泥町村）の一つで、人馬の継立（つぎたて）業務を行う問屋（といや）場や参勤交代で通行する大名などが宿泊する本陣が設けられていました。今回の古文書講座のテキストも枚方宿ならではの文書を取り上げています。宿（しゅく）に集まる荷物の輸送に関して近隣の村々と話し合いをしている様子や、伝馬（てんま）が少ないのでよろしく取り計らってほしいというような内容も史料で確認できます。受講者は先生のお話に興味深く熱心に聞き入っていました。

◆くらわんか鋳物ツーリズム2023
8/11・10/9・11/23　のべ18組56人

旧田中家鋳物（いもの）民俗資料館と現代の鋳造（ちゅうぞう）技術で製品をつくっている市内の企業を巡るイベントです。午前中の旧田中家鋳物民俗資料館の見学では、資料館で伝統的な鋳物づくりを学べるキット「地域文化の宝箱」を使い、触ることのできる模型などを参加者に手に取ってもらいながらの解説や、鋳物工場の見学を行い、鋳物の歴史や昔からの鋳造技術について学びました。

午後からの市内企業の工場では、最新の鋳造技術や、製品化されるまでの過程を見学しました。８月11日はコマツ大阪工場、10月９日は寿ダイカスト工業（株）、11月23日はクボタ枚方製造所の工場を見学。参加者は工場の人たちから説明を聞きながら、製品ができあがっていく様子を感心しながら見ていました。

編集後記

もういくつねるとお正月…♪ではじまる唱歌（しょうか）『お正月』。子どもたちがお正月を待ちわびるこの歌の１番の歌詞には、「凧揚（たこあ）げ」と「こままわし」、２番の歌詞には、「毬（まり）つき」と「おいばね（羽つき）」が登場する。作詞は東（ひがし）くめ。日本で初めての口語体童謡（どうよう）『鳩ぽっぽ』の作詞者である。作曲は、『荒城（こうじょう）の月』で知られる滝廉太郎（たきれんたろう）。現代まで歌い継がれる多くの童謡を作曲した。近ごろでは外で遊んでいる子どもを目にすることは稀（まれ）で、子どもたちの元気な遊び声すら耳にしなくなった。お正月の景色を憂（うれ）い、今年の暮れは松任谷由実＆桑田佳祐の『Kissin' Christmas（クリスマスだからじゃない）』でも聴いて、メリークリスマス＆ハッピーニューイヤーとつぶやこうかな♫